

「ドレ、お待ちなさい、聞いて上げますから」

ど、一寸耳を澄すかと思へば、忽ち破顔一笑。

「ハッハッハ、之りやア驚いた、實にお安くないですか」

「何んのことです、お安くないとは」

「ナニその、妻は貴郎を甚だ愛しますと言つて居るのです」

「デヨ、冗談をツ」

ど、何気なき体には言ふもの、その實際程嬉しいと見ぬて、たゞさへ下つた眼尻は敏と共に垂れて居る。

「冗談じやアありません、たゞそれだけなら好いですけど、大變御様子の好い方だつて、ハッハッハ、御覽なさい、彼んなに見惚れて居るじやアありませんか」
言はれて、我れ知らず女の方を見れば、成程、自惚れの眼には實際それらしく映るので、今更らしく身繕ひして、反耳になるやら、頸飾りを直すやら、メッキ

の焼穴を隠さうとするやうで、その忙しうと云つたらなら、かと思へば盃持つ手さへ自から氣取つて居る。

「それから、未だ何んか云つて居ますよ……何んだつて……之りやア驚いた、實際お安くないなア」

「何んです、未だ何んか云つて居ますか」

「云つて居ますとも、貴郎にはお女房さんがあるでしやうつて、ハッハッハ、御覽なさい、彼の眼附らさ」

「デヨ、冗談をツ、ワイフなんぢはないです」

と、我れ知らず女に對つて辯解したのだが、話の通せぬものと氣付くや、又も彼の男に向つて。

「ワイフなどは無いと云つて下さう」

「ハッハッハ、何うだか知れませんか、初對面の女にさへこの通りヤイノノを

極められるんですもの、國には必然奥さんもあるでしょうし、彼方此方に色女の二人や三人はあるのでしよう、何うも様子がさうのやうで、ハツハツハ、色男ツ」
うも、この男が斯かる言辞を弄することや、又はその風采態度に少しく注目するならば、決して教育あるものでないことや、何んの爲めに煽て上げることやらが直ぐにも了解されて、同時に、この怪しきホテルの真相が直ちに分らねばならない筈だのが、情けないことには兩人共もう魂が藻脱けの殻になつて居るのだから、たゞ心を女の前に配ることの外には敢て何事にも意を止める程の餘裕は毫末もないのである。

「デ、實際ワイフなどはないのですからね、其處を誤解されないやうに何うか」
「ハツハツハ、眞面目になつて辯解するだけが怪しいですなア、何んぞ奢らんとこの女の前で素ツ張抜さますよツ」

「それは、奢つても好いですがね、併し、實際そんな譯じやアないんですから……」

「奢るなら黙つて居て上げましょうよ、ハツハツハ」

「黙つて居ちやア却つて疑られますから、無いといふことを話して下さい、ワイフと言へばその先生が有つて居るのです、而も罪の深いことには欺いて置か去りにして来たのです」

「オイ小池君、何を言つてるんだ、デモ、冗談じやないが、僕に噂アなんぞあつて堪るもんか」

「變カラ先生脚氣となつて辯解して居るが、それもその筈、相手の女は同じやうに先生を眺め遣つて居るのだ、それを矢張り女房のあるなしを氣遣つて居るものと自惚れにも早飲み込みをして居るのである。」

酒は机上に倒れて、肴は縦横に荒されて居る、二人はもうひびく酔つて居る、それを、彼の男が何やら女に目配せすれば、女は首肯して切りに杯を勧めて居る。

「もう酔つた、とても否けん、併し愉快な旅人宿だわい、なア君、東京などが如

何に開けて居ると云つても、歐米の文明國へ来て見ると、とても足許へも追ッ付かれんなア、そりやア成程、繁華と壯麗といふ點なら、之までとて格別驚きもしなかつたが、この旅人宿に至つては實際敬服するからな」

云ふ如く先生全く酔ふて、もう呂律さへ怪くなつて居るが、それでも異郷の美人に思ひも寄らぬ優遇を受けて、御機嫌甚だ斜めならないのだから、口は淫しく吃つても性来の藐視みは尙ほ機敏に働いて居る。

更らに、ハオカヲ先生はと見れば、これは最う全く意氣地なく酔ひ潰れて、美人の膝に倚りかゝつて涎をだら／＼流しながら、最前氣にして居た上衣の皺やズボンの焼穴もすつかり忘れて居る。

「オイ小池君 寝ちやア否かんよ寝ちやア……」

「ウム、僕はもう澤山、君等飲みたけりやアもつと飲みたまへ、今日は僕が奢るからぬ、ウム、何んだつて、ア、さうか、なに宜いよ、それから女中に祝儀の一回

しんぞうと書いて「おんぞう」

飛んだキツス

華盛頓府の端れ、やがてはもう田舎にならうといふその片透りの、美しき洋館の三階の窓から、間抜けな面を出してはんやり往來を見下して居るのは蠻カラ先生である。

見れば、例の汚ない上表はかなぐり捨て、チヨッキ一枚の軽々しい扮装に手には手巾を携へて居る、額からはポツポツと汗が流れて、呼吸も若しさうにはづんで居る、外でもない、兩人熟議の上離れくとなつて、暫らく身の振り方を落ち付け、ハイカラ先生は傳手を求めて苦學生の一團と共同の寢食をなし、蠻カラ先生獨りこの家にスクールボーイとなつて今日で二日目の、今しも窓拭きを命ぜられて慣れぬ勞働に早くもへこたれて居るのであつた。

「若し〜ッ、そんなに情けて居ちやあ否けませんよッ、定まつた時間はチヤン

とそれだけのことをしなくつちやや小言を言はれますから」

後ろから呼びかけたのはこの家のクック、幸ひに邦人であるから蠻カラ先生には何より之れが幸福であつた。

「やア、君ですか、實は慣れんもんでね、少し働くを直ぐにこの通りで言ひながら、額の汗を拭きて。」

「併し、呑氣なことは呑氣な仕事だけれども遙々日本から出かけて来て、知らぬ他國でこんな苦勞をするかと思へば、實際情けなくなるね」

「でも、此地へ来て居る書生さんは皆こんなことをして學問をして居るのですから、何も力を落すには及びませんや、それに、無學な私共と違つて、辛抱さへして居れば如何位でも出世が出来ゐるんですもの」

「ハッハッハ、うの出世が怪しいもんでね、實は是れまで度々出世の糸口もあつたのだけれど、何時もそれを踏み外して了ふんだから困るよ」

「ハッハッハ、すると矢ッ張り女の子だね」

「これは御眼識恐れ入つた、違えねえ、之れも矢ッ張り彼の子のお陰かね」
言ひながら、銅羅盤を微かに振り絞つて。

「今度は……半七ツつあん、ヒネなかつた、何處に何うして……」
ど、呑氣にも義太夫の陰り出した。

「之れは驚いた、實際香氣な方だ、そんな心掛けたから出世の階梯も踏み外すん
でさア、ハッハッハ、併し、久しぶりで義太夫などを出くと、思ふと日本も戀しく
なりますねえ、私などはもう七八年も此地にうろついて居ますよ……」

「では戀しくなる筈だ、國には娘や子供はないのかね」

「それはあるんだから戀しいんですよ」

「すると、金でも溜めて娘や子供を悦ばせやラツてんだね」

「まアそんな譯ですすね、實は之れまでさんく苦勞をさせて、その上私がこん

な所へ突ッ走つて來たのですから、思ふと尙ぬ更ら可愛相になりますよ」

「矢ッ張り御同様で、言は、他の尼ッ子にでも引ッかゝつたといふような譯か
ね」

「ハッハッハ、まアそんな譯で……」

「其奴ア中々話せるわい、お互ひに辛抱して少ツと眞面目にならなくツちやアね
僕なんざア餓鬼ころないが、矢張り女房があるんでね、御同様にたつた一人の女房
をさんく苦勞させて、お負けに、お了へが旨く欺し込んでこんな所へ飛んで來た
たるから、思へば罪な譯さ、あーア、何んだか心細くなつた……エ……後に……残
りし……妻や……子……が……」

と、今度は追分を歌ひ出した。

「所で、こんなもんで可かね」

「之りやア驚いた、拭かん方が可い位なもんだ、ハッハッハ、實際之れヒヤア仕

方がありませんよ。

「文句を言ひたまふな、未だ新参の何んにも知らんのだから」

「香氣に歌なんぞ歌つて居るからださア」

「ヘン、何處に……何うして……月日……を送るや……ら……て、こいつア中々

骨が折れるわい、あ、疲勞れたッ」

歌つては拭き、拭いては歌つて居る所へ、突然闇を排して入つて來たのは、蠻カ

ラ先生未だお顔を拜んだことのないこの家の妻君、年は二十五六の、日本の形容で

言へば窈窕の美人、それが、しどくと蓮歩を運んで來たのだ。

見ると、クツクは慌て、逃げ出して行つた。

「オイ君ッ君ッ、逃げちやア困るよ、僕は話が分らんのだから」

とは言つたが、クツク先生返事もせず姿を隠して了つたので、取り殘された蠻

カラ先生今更ら間の悪さに、知らぬ顔でスタコラ窓を拭き立て、居る。

が、美人はうの拭き方の粗末なのに吃りした顔して、不平でも云ふ積りなのか、
やがて蠻カラ先生の傍らに進み寄つて、突如べらくと饒舌り出せば、先生慌て、
飛び退つて、矢庭に低い頭をこつくとニツニツ。

無論、頭を下げるのが何の意味かは美人には分らない、分らないだけ尙ほもべら

くと口を動かすので、先生持て餘したやうに頭を掻いて居たが、何んと思つたの

か、突然、猿臂を伸べて美人の領を抱え込むかと思れば、汚ない口で花のごとき美

人の口をチユツとキツス。

怪む勿れ、これは蠻カラ先生の豫てキツスを敬意の表状と聞かされて居たので、そ

れを、端なくも思ひ出して今茲に敬表を表したのだ。」

一夜のお拂ひ箱

蠻カラ先生の意外のキッスに、不意を喰つた美人は餘りの椿事に我れ知らずキヤツと叫んで、同時に、細い白い手に殆んど無意識に蠻カラ先生の頬げたを叩いたのだが、併し、風にも得堪へぬ女の力で叩いたのだから、叩いたといふよりは寧ろ撫でたといふのが適當な程で、武骨な蠻カラ先生には何んの痛みも感じないのみか、寧ろ、撫でられたものと感じて内心はくくして居るのだから遣り切れない。

けれど、美人の手が頬を撫でたかと思ふと、ドタリ、管ならぬ物音がしたので、ふと氣が付いて美人を見れば、こはそも、美人は仰向けに倒れて、一寸、眼を白黒にしたかと思へば、後は齒を喰ひしづたまゝピタとも動かない。

それを、怪訝な顔して眺めて居た蠻カラ先生、暫しはうつとして見惚れて居たが、事の意外に不審を起して、ソット窺ひ寄つたが、見れば、固くなつて動かぬ

のみか、息さへ絶えて居るので、今更らのやうに愕り飛び上つて。

「ヤツ、死んぢまつたッ」

頓狂な叫びを放つて、室内をうろ／＼まどついて居たが、やがて。

「大變々々ッ、来て呉れッ来て呉れッ、オーイツ、オーイツ」

叫びながら慌て、クック部屋へ走れば、クックは何事かと膽を潰して。

「大變どは何んです、玻璃でも壊したのですか」

「そんなことじやないッ、ハ、ハ、早くッ、水ッ、水ッ」

「何を言つてるんです、そんなに忙て廻つてばかり居て」

「何を言つてる所の騒ぎじやないよッ、此處の嬢が……ひ、引ッくり返つたんだッ」

「引ッくり返るとは何んのことです」

「そんなに落ち附いて居ちやア仕様がな、し、し、死んぢやつたんだッ」

「エッ、死んだッて、今までびんくして居たヒネアありませんか」

「キ、キ、氣絶ッ」

「エッ、氣絶ッ」

ど、クツクもさすがに愕りしたが、それでも尙ほ自分の耳を疑るやうに。

「氣絶ッて何うしたんです」

「ア、ア、てんかんを起したんだよッ」

言はれて、今度は慌て、駆け出したが、来て見れば、成程美人は引ッくり返つて居る。

「ヤッ、水ッ水ッ」

言ひながら、急しく傍のペルを激しく押せば、急の知らせに駆け附けたのは、主人の赤髯始めの他の二人三人。

やがて、多勢の介抱に漸く息を吹き返した美人は、氣が附くと今更ら不思議げに

四邊を見廻して居たが、ふと鬘カラ先生は顔を見ると又も愕りして駆け出さうとしたが、主人が確り抱きかゝえて居るので、始めて我に返つた美人は、恐しさうに鬘カラ先生を指しながら、主人に向つて何やらペラ／＼と語り出せば、見る間に主人は血相を變えて、ぶる／＼と慄へたかと思へば、矢庭に飛んで来て鬘カラ先生の頭を骨も砕けよとばかりに三ッ四ッツ。

〇いよく世界の漫遊

肝腎出世の資本をさんぐの失敗に費ひ果して、今は残り少なくなつて居る所へ怪しいホテルに宿つて又も眠のくり玉の飛び出る程の傷い目を見せられたので、ハイカラ先生一時は著くなつて茫然としたのだが、せめては残りの金で申譯にでも通學せんものと、蠻カラ先生をスクールボーイに追ひ遣つて、先生一人は邦人の苦學生一團と薪水の勞を取り、四十の髻面下げて茲に十餘年前の書生に若返つたのだが規則正しい學科などは無論のこと、リーダーの一さへ讀めぬ情ない身に、固より満足な學校などは思ひも寄らず、せめて 會話の出来る中だけでも、それでも殊勝な心掛けを起して、いよくさる小さな學校へ通ふて居るのだが、十二三から十五六の生徒の一群に投じて、鬼ごっこやら繩飛びの仲間入りさせねばならぬことゝなつた。

が、そんな遊戯事で、無事に通せるなら、固より死んだ覺悟の筈の堅い決心を有して居るのだから、如何に見ゆ坊の先生と雖も敢て意とする所ではないが、情けなや罪なき子供はこの意外の生徒の而も人種の異つて居るだけ、物珍らしさに目引き袖引きして笑ひ且つ嘲つて居る、と言つて、話の通せぬ先生うんなことは一向平氣なのだが、平氣で居られないのはたゞ子供の惡戯で、言はゞ同窓の生徒を叔父さんとも思つて居るのか、頭にぶら下るやら、首ツ玉にカチリ附くやら、果ては、面白半分に打つ擲くといふ乱暴に、さすが分別面の先生も之れには分別しかねて、今しも子供にイチャメられて泣きッ面しながら悄悄と學校の門を出たのである。

門を出て 歸路に就くべく暫らく辿つて居ると、突然、先方から茫乎やつて來たのは外ならん蠻カラ先生である。

「やゝ、何うした……」

言葉をかけたのは先づハイカラ先生。

「やア、君こそ何うしたね、茶い御勉強だが、何うだ、少ツとは會話でも出来るやうはなつたのか」

「所が、カエ否けないんだ、第一、この邊の子供は癖が悪いんでね、實際こりごりだよ」

「時に、君は全体何うしたんだ、今頃ぶらぶら道つて来て」

「實はな失策をやつたんだよ」

「君の失策をやつたんだよ」

「君の失策なら珍しくもないが、全体何うしたのだ」

「お拂ひ箱よ」

「お拂ひ箱ツ、何んか悪いことでもしたのか」

「だから失策をやつたツたら」

「之りやア驚いた、失策をやつて居ながら威張るとは非道いじゃないか、所で、

失策といふのは何んだ」

「うんなことは聞かんでも好いよツ」

「隠すだけ怪しいじゃないか、まさか泥棒でもやつたんじゃないね」

「デヨ、冗談をツ、そんなことではないから安心したまへ」

「所で、それはさうとして之れから先きは何うするんだね、うんな暢氣なことはから言つて居て」

「仕方がない、又君の食客よツ」

著者曰く。

兩君の奇行醜態は中々之れ所ではない、寧ろ之れから先きの、即ち、蟹カラ先生が窮策の餘り又もヘイカラ先生を煽動して、國への申譯にいよく世界漫遊の途に上つたその以後の珍談奇聞、要するに之れから先きが本舞臺なのだが、限りある紙

數に一々それを數へ上げられないのだから、こゝ別に筆を改めて滑稽洋行土産と題し、後日再び紹介することとして、茲には一先づ之れで筆を擱いて置く」

洋行 奇談 世界滑稽旅行 終

明治三十九年四月廿五日印刷
明治三十九年四月廿一日發行

(世界滑稽旅行)

* 定價金廿五錢



著 者 五 峰 仙 史

發 行 者 岩 崎 鐵 次 郎

東京市神田區鍋町二十一番地

印 刷 者 木 村 榮 吉

東京市京橋區采女町十番地

印 刷 所 文 英 社

東京市京橋區采女町九番地

發 兌 元

東京市神田區鍋町二十一番地
電話本局三〇六七番

大 學 館

羽化仙史著

(密書寫真版入)

口冒險怪奇文庫 第一編 一生冒險奇旅行 價廿五錢 郵稅四錢

支那の一娘米國の一丈夫と契り、萬里の路程途に幾
風に逢ひ、娘は海中に没す。丈夫失戀の餘りに、娘の
娘の娘に苦めらるるを、夫は決然と探險の途に上る。子
娘の溺れ免れ、海賊の船に逢ひ、夫は深淵に入り、依
り半死に苦む。此間、氣球上座、深淵に入り、依り半
切の船に逢ひ、夫は深淵に入り、依り半死に苦む。此
ふ粒粒辛苦に、此間、氣球上座、深淵に入り、依り半
露して、問答の機を、此に結ぶ。夫は深淵に入り、依
り涙あり、花神舞ひ、海若狂ふ、究に多難多味、壯快無
比の文字。

羽化仙史著

(密書寫真版入)

口冒險怪奇文庫 第三編 新海底旅行 價廿五錢 郵稅四錢

勇壯快活なる一青年と、幼妹婿たる少婦と相締盟し海
底を占領して日本の版圖に加へ、金銀珠玉の珍寶採拾し
千古の大偉勳を企つ。或は鯨に襲はれ、電魚に擄まれ、
敵に傷けられ、望族に苦しめらる。或は羽衣を被て、敵軍
の動靜を伺ひ、密偵に固し、少中、に擒せられ、千辛萬苦
具に奪めて、終に業志を貫く。遂に若壯大破天荒の怪文
字

羽化仙史著

(密書寫真版入) (再版)

口冒險怪奇文庫 第二編 奇人の航海 價廿五錢 郵稅四錢

空前奇妙爆裂彈の發明者、絶海の寶島に隱る、共榮園の
一士官、好奇心勃然として禁ぜず、新嘉坡の旅館に海賊
の巨魁の秘密箱を奪ひて、寶島の位置を知り、同志を募り
て萬里の波濤を蹴る。士官一孤島に偉人に逢ひ、具に發明
の傳授を受け、船艇に乗じて、マダガスカルに到る。其時
さし、此地に理學士の新發明、折望遠鏡に依り、嘗て已
に戀して海賊に捕はれ居る、娘子の行衛を知り、遂に奪
て、これを救ひ、遂に階老を契るの縁を經す。

羽化仙史著

(密書寫真版入)

口冒險怪奇文庫 第四編 月世界探險 價廿五錢 郵稅四錢

科學界の一大發明あり、月世界旅行機械、これなり、未
曾有の人傑と、絶世の美人と相携へて、萬里大空に飛揚
す、其遭遇する危難、逢着する奇蹟果して如何、怪事
あり、快事あり、讀了一遍、身は濕り、天竺萬里
の外にあらん。

羽化仙史著

(密書寫真版入)

口冒險怪奇文庫 第五編 奇人の魔法 價廿五錢 郵稅四錢

黒赤二個の狼を、憤り、數百の狼軍を指揮して、生殺與奪を
恣にする怪人あり。容貌醜陋なるに、美人に戀慕して、無數
の悪事をなし、魔力の下に、懐胎せる中に、無邪氣の少女あ
り。淫弄伯爵夫人あり、屠者なる男爵あり、靈魂忍び休を
換へ、乍ら死し乍ら活く、神變不思議、想像以外の怪文字。

羽化仙史著

(密書寫真版入)

口冒險怪奇文庫 第六編 小説新ナポレオン 價廿五錢 郵稅四錢

乞食より帝王となりし英雄と、娼婦たる皇后と錯綜し
たる物語、激戦あり、惨死あり、妖嬈に誘拐さるゝ危
禍あり、大蛇に巻かれる裸美人あり、一攫萬金を得る快
事あり、「聖地のナポレオン」として、馳名、世界を震動
するの事實は、讀者をして巻を捲く能はざらしむ。

羽化仙史著

(密書寫真版入)

口冒險怪奇文庫 第七編 船幽霊 價廿五錢 郵稅四錢

何ぞ題目の一讀人を驚殺するや、波瀾大船を掀翻して
天靈の如し、魅惑躍り、妖怪跳る、勇士あり、奇人あり
美女あり、凶漢あり、全編悉く血躍り肉飛ぶの文字。

羽化仙史著

(密書寫真版入)

口冒險怪奇文庫 第八編 妖怪山の英雄 價廿五錢 郵稅四錢

非凡の人傑あり、亞弗利加の天地を震憾す、妻？妹？
絶世の佳人賊に苦しむ、姉妹に憐む、一青年あり、猛獸を
友として、不思議の怪力あり、或は獅子に擡はれ、或は
高山に迷ひ、毒殺あり、屠殺あり、屠殺あり、國と人
との運命如何、讀むもの珍話と奇聞に、駭目驚魂せずん
ばあらず。

三宅青軒君著 (寫真版入)

探奇小説 不思議の娘

價三十錢 郵税四錢

花の如き乙女忽然として孤兒院に降る。天よりの、地よりの奇々怪々の謎團に筆を起し、清康の君子あり無名の豪傑あり慈母の如き婦人あり仙骨ある衛伯あり變幻出沒讀者冥々として闇夜を辿る。如し已にして月光忽ち明に春風煦々花の如き乙女は玉の如き青年と僧老の契を結ぶに到つて謎團氷釋す。

曉風山人著 (寫真版入)

探奇小説 秘密の怪洞

價廿五錢 郵税四錢

佛國名家の嫡男を以て消息なし、遺産相續の野心ある二人の男女戀愛の爲めに相婚し、利慾の爲めに相反目し非命に死するを轉とし離船して救はれたる乙女、族姑の爲めに無底の怪洞に陥り、九死に一生を得て海賊の爲めに英國に送られ父子再會するに局を結ぶ、戀愛あり、義侠あり、冒險あり野心あり、讀者をして塵埃に迷なからしむ。

鹿島櫻菴君著 (寫真版入)

探奇小説 世界の秘密國

價廿五錢 郵税四錢

世界の秘密國として有名なる四蔵探險の勇士を以て生死を知らず 搜索者更に魔法に依つて生地獄に落ちて返らず此に於て、志士同志と共に百難千難を冒し狂歌變人と戦ひ遂に目的を達し秘密の大寶庫を開いて全世界を驚嘆せしむ、寔に無類の怪奇文字

櫻田翠月君著 (寫真版入)

滑稽小説 臆病將軍

價廿五錢 郵税四錢

過ちの功名は勇士の譽を得死物狂ひの滅茶滅茶働には死ぬに極まつた生命を捨ひ、思はぬ所で戀人に邂逅するなご臆病詩人か、滑稽の經歷には人の運命の如何に不可思議なるかを嘆せしむ血腥き風吹けば雲の如き雨降る寔に妙味津々として盡きざるの文字。

櫻川老 譯著

機智 頓智 百話

價十五錢 郵税四錢

本書は古今の英雄豪傑、名媛、賢女、詩人墨客、頓智高僧等凡て世に傑出したるものろく、人物が其奇才頓智に依つて身命を全うし、禍を免れ、奇利を得し、名聲を擧げ、或は國の爲めに、家の爲めに、君の爲めに、父母親戚の爲めに、故郷の爲めに、或は一身の爲めにせる奇談珍話幾百を、更に輕快流麗の筆を揮つて眼前に映るが如く直接に讀者が如く描き出たせるものなり。以て談話會の好材料とすべく、家庭の教訓とす可く近時絶てて見ざるの珍書なり。

映笑 子著

奇談 滑稽 大集會

價十五錢 郵税四錢

本書は古今並に新作の奇談、珍話、落語、一口噺、囃落等すべて讀むものをして抱腹絶倒せしめ、お膳の滑稽をなごし、頭のかきかき外さしめずんばやまや、國境線も堪へ切れずと噴き出す可く、釋迦も孔子も基督もげらぐと大口開いて噴き出す可し、諸君の退屈する時、風託する時、煩悶する時、一度此書を讀めば忽ち樂天主義となる事寄席へ行つたよりも機能があるなり。

宮崎來城君序 軒渠道人著 (寫真版入) (五版)

地腹 大笑 百話

價十五錢 郵税四錢

滑稽の人に在る暴君暴主をして黙然として感悟する處ありしめ談話の世に利ある笑ふ門には福來るの俚諺に徴しても明なり滑稽笑話の人情を和けて間接直接に世の秘訣を教ふる事古今東西其例尠からず談話の中風刺あり嬉笑の閑よく禍を防ぐ、かの人生活口を潤して笑ふ事難しと嘆せ一日主人笑ふ事幾國と嘲つ者も三節は五節に對りて必ず抱腹せん絶倒せん、本書は實に病者に對て醫藥に優り、閑者に向て天來の妙音なりとす。

可笑極喜樂著

滑稽 大笑 種本

價十五錢 郵税四錢

本書は古今和漢東西に渉りて抱腹絶倒滑稽無類の一口噺、落語、短話、百數十編を網羅せるもの諷刺あり教訓あり、罵詈あり。僧あり、俗あり、老幼貴賤賢愚美醜錯綜として各種各様の姿態あり、武士商人、車夫船頭、姑、嫁、婢、娼婦、息子、高僧、女學生、社會各方面の人物が、冬々特色の滑稽を發揮して笑ふ可き噴き出す可き辭が茶を濁かす可き珍無類の奇書なり。

野狐狂禪著 (寫真版入)	價十五錢 郵稅四錢	一休和尚頓智笑話	甘薯子著 (寫真版入)	價十五錢 郵稅四錢	抱腹放屁百話	實病古武士著 (寫真版入)	價十五錢 郵稅四錢	妖怪新百話	原山東風君著 (寫真版入)	價十五錢 郵稅四錢	木賃宿	裂面散士著 (再版)	價廿五錢 郵稅四錢	社會明治娘評判記	池田錦水君著 (再版)	價廿五錢 郵稅四錢	戀の一年有半	池田錦水君著 (再版)	價廿五錢 郵稅四錢	女學生氣質	池田錦水君著 (再版)	價廿五錢 郵稅四錢	社會女心の解剖	池田錦水君著 (再版)	價三十錢 郵稅六錢							
機轉子著	價十五錢 郵稅四錢	軍人頓智叢談	河村扶桑君著	價十五錢 郵稅四錢	武士道百話	長田偶得君著 (八版)	價三十錢 郵稅四錢	明治六十大臣	墨堤隆士著 (六版)	價三十錢 郵稅四錢	大臣の書生時代	墨堤隆士著 (寫真版入)	價十八錢 郵稅四錢	人物の食客時代	青年	價十八錢 郵稅四錢	豪商の雇人の時代	立志	價十五錢 郵稅四錢	北米無錢渡航	天誼歸客著 (寫真版入)	價廿五錢 郵稅四錢	西山筑濱君著 (寫真版入)	價廿五錢 郵稅四錢	英雄の道樂	修養英	價二十錢 郵稅四錢	桐次散士著 實境寫真版入	價廿五錢 郵稅四錢	暗面夜の女界	奇觀	價廿五錢 郵稅四錢

池田錦水君著 (寫真版入) (三版)
無錢修學 價廿五錢 郵稅四錢

本書の目的は青年が苦學力行を奨励するに在り、因循姑息の念を除去するに在り、獨立自活の法を教ふるに在り、或は新聞配達となり、立坊となり貸家捜となり、托鉢坊主となり、車夫となり、苦心困難の境遇を小説的に描き出す、附録學生自活法

早田玄洞君著 (寫真版入) (三版)

風雨の暗夜社廢寺を探り、刑場古墳を尋ねて膽力を練磨したる實歴を描寫せるもの目次を一説し如何に本書の趣味饒多にして練膽の道に益あるかを知らしめ曰く人魂曰く古寺、化地蔵、古刑場、水垢離、丑の刻、古城の橋、廢窟の一夜、食人怪、死人番、背面鬼等三十六項に分つ附録として釋宗演禪師の座禪工夫を載す

加瀬花那君著 (寫真版入)

本書は名門に生れし硬骨男子が威勢に屈せず奮然として故郷を後にし花の如く美に才智膽力有骨男子を凌ぐ幼婦の美人と相携へて萬里遠征の途に上り道に一箇の船丈夫と逢ひ南洋の黄金窟を探險するの奇々妙々の珍小説

矢野滄浪君著 (寫真版入) (三版)

本書は著者が實際に事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活讀むものをして身その中に在るの感を起さしむ處に近時片々たる歇小説に比して趣味饒ること甚だ多し。らず苦學の書生に感樂を興ふることを甚だ多し。

口**食客** 價二十錢 郵稅四錢

口**膽力修行** 價廿五錢 郵稅四錢

宮崎來城君著 (密書寫真版入) (十四版)

無錢旅行

價廿五錢 郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋渉するに在り、風を穿ひ露を飲み乞食と合宿するなど辛苦の中に忘れぬ趣味の存するものあり、此世に出で、忽ち十數版を重ねたり以て如何に壯快なる體物なるを知れ。

鐵玉脚 于著 (密書寫真版入) (再版)

野宿旅行

價廿五錢 郵稅四錢

汽車の便を捨てて自轉車の捷を稱し、膝栗毛に纏つて三個の風來漢が到る處に滑稽を演じ失策を惹起し、而も豪放落一雄に逢ふ毎に愈々勇を増し青天井に草枕天地の寂寞を破る剛強聲は遠く來れしと大手を振つてもしめ一瓶の正宗に微酔の餘往來快しと大手を振つても流石野道の香氣此上もなき一讀噴飯滑稽無比の旅行記なり。

宮崎來城君著 (密書寫真版入) (九版)

乞食旅行

價廿五錢 郵稅四錢

腹に萬巻の書を貯へながら旅行のしたさに飯粒を片手に乞食の仲間入して彼處此處と經廻つた實歴談である、三日したら止められぬといふ乞食の境遇はどんなものであらうか來城氏の無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多い事を悟るであらう。

鐵脚 于著 (密書寫真版入) (再版)

貧乏旅行

價廿五錢 郵稅四錢

囊中の空乏は辻堂に泊して地蔵の慈悲を感じ橋を渡り覺悟して旅の憂さを悟り愈々進みて愈々究し愈々究して愈々勇を得此に於てか奇談百出珍話續々として湧く一讀柔翁男子の懶眠を覺醒するに足るものあり。

鹿島櫻菴君著 (寫真版入)

探奇變裝の怪人

價廿五錢 郵稅四錢

忽ちにして精髪の洋人、忽ちにして白髮の老翁、變して温厚の好紳士、化して無類の兇漢、變裝の怪人とはこれ、これを謂ふ、寔に妖怪の業乎、鬼神の技乎、萬金を盗み、殺人を敢てし美人を誘拐し、而も親友とし紳士として警察官老探偵の眼を晦ます、義侠なる青年が機敏なる活動はよく千辛萬苦を厭はず大犯罪者の假面を剥ぎ、可憐薄命の美人を毒手より救ふ、妖雲一過して月始めて明なり、讀去誦來、感慨無限!!

長田偶得君著 (寫真版入) (四版)

妖怪奇談

價十五錢 郵稅四錢

本書は古今の幽霊妖怪の珍話奇聞中より最も面白く最も不思議なるものを選び、奇抜の筆を以て描き出されたる者一讀後、膚粟を生ずるの思ある可し、本書は實に消閑の讀物として、長夜の好談柄として適當なるのみならず、或は以て靈魂不滅の善證となすべく、或は以て人情の極致を味ふ可く、或は以て世態の醜態を知る可く、或は以て膽力練磨の一助となす可し、

鹿島櫻菴君著 (寫真版入)

探奇野原の怪郎

價廿五錢 郵稅四錢

人乎、鬼乎、陰火燃ゆ、悲鳴洩る、野原の空屋敷は衆人の疑問、青年身を挺して探偵の活躍よく隠形術を觀破し古萬籠の死骸再び言を發して秘密の緒漸く解く一大罪惡忽ち暴露して疑團此に氷釋す、奇遇あり、奇縁あり、天遂に正に與す、人乎然り、鬼乎然らず、否、人間の、鬼の如き兇漢あり、一讀三嘆!!

押川春浪君著 (精巧寫真版入) (再版)

千年後の世界

價廿五錢 郵稅四錢

千年後の世界は光明世界にあらず、暗黒世界なり、天國に非ずして地獄なり、山は崩れ、海は濁れ、美人も紳士も野獸の如くなり、著者序文に於て喝破す而して、説く結果として如何、編を分つ事三十項、花の如き女傑あり、劇中の論あり、悪魔の裸踊、決闘あり、紳士と博士と、千年後の世界に入り不死の薬水に入り神の姿の人となり、千年後の世界に入り不死の薬水を見て驚愕せしるに局を結ぶ奇想天外より落し快筆天馬の如し。

羽化仙史著 (寫真版挿入) (再版)

口冒險 百難旅行 價二十錢 郵稅四錢

一難されば一難來り前門虎を防げば後門狼を避け、幾度か宛に困み屢々災に遇ひ或は放浪或は漂流、水火の巷に出入し劍戟の間に踰躍す、一少年が豪勇と義膽とを讀む者をして感憤興起せしめずんばあらず、遂にこれ冒險小説中の傑作。

加瀬花露氏著 (寫真版挿入) (再版)

口モンゴリヤ妖怪村 價廿五錢 郵稅四錢

征露の役軍中より逐まれて斥候として派遣せられたる三勇士が道を失ふてよりさまぐの怪事奇蹟に遭遇し或は虎に養はれ妖怪を退治し幽霊と談し危難に類し災厄に遇ひ遂に戦死せしと思はれし三勇士が遂なく歸つて大功を現はす快譚なり。

羽化仙史著 (寫真版挿入) (再版)

口奇女無錢旅行 價廿五錢 郵稅四錢

一奇女あり容貌花の如く音聲玉を轉するが如し而も膽力遙に有る男子を凌ぐ途中一錢の時もなく英國、佛蘭西、獨逸、米國等歐洲大陸を跋渉し到る處奇談珍説の中心なる讀者幸に恍惚として自失せずんば幸なり。

米國 ミス、マロツク嶺原者 三浦天民君譯

口新空中旅行 價廿五錢 郵稅四錢

一王國の王子が王位に即き攝政の叔父のために位を奪はれ一孤塔の中に閉せられしに王子の降臨當時より不思議なる老漢頭はれ此に王子のために或は雲雀となり燕となり智識を増さしめ空中を飛行する等自在なる秘術切れを與へ王子に故郷を眺めしめて自分を自覺せしめ遂に王位に還ると云ふ不思議なる少年小説なり。(再版)

三宅青軒君著 (寫真版挿入)

口探奇 不思議の娘 價三十錢 郵稅四錢

花の如き乙女忽然として孤兒院に降る、天よりか、地よりか奇々怪々の疑團に筆を起し、清原の君子あり無名の豪傑あり慈母の如き婦人あり仙骨ある 高僧あり變幻出沒讀者冥々として闇夜を辿るが如し已にして月光忽ち明に春風煦々花の如き乙女は玉の如き青年と偕老の契を結ぶに到つて疑團氷釋す。

曉風山人著 (寫真版挿入)

口探奇 秘密の怪洞 價廿五錢 郵稅四錢

佛國名家の嫡男香として消危なし、遺産相繼の野心ある二人の男女戀愛の爲めに相婚し、利慾の爲めに相反目し非命に死するを緯とし難船して救はれたる乙女、嫉妬の爲めに無底の怪洞に陥り、九死に一生を得て海賊の爲めに英國に送られ父子再會するに局を結ぶ、戀愛あり、義侠あり、冒險あり野心あり、讀者をして應接に遑なからしむ。

鹿島櫻菴君著 (寫真版挿入)

口探奇 世界の秘密國 價廿五錢 郵稅四錢

世界の秘密國として有名なる西洲 探險の勇士香として生死を知らず 搜索者更に魔法に依て 生地獄に落ちて返らず此に於て、志士同志と共に百難千難を冒し猛獸人と戦ひ遂によく目的を達し秘密の大寶庫を開いて全世界を驚嘆せしむ、遂に無類の怪奇文字

櫻田琴月君著 (寫真版挿入)

口滑稽 病將軍 價廿五錢 郵稅四錢

過ちの功名は勇士の譽を得死物狂ひの滅茶滅茶勳に死ぬに極まつた生命を拾ひ、思はれ所て戀人に邂逅するなき臆病詩人が滑稽の經歷には人の運命の如何に不可思議なるかを嘆せしむ血脈き風吹けば壺の如き雨降る遂に妙味津々として盡きざるの文字。

三宅青軒君著

(寫眞版入)

口武士道 士手の道哲

價廿五錢 郵稅四錢

忠義無双の美男子、豔麗無比の美女に戀せられ、暗君暴臣の奸計に依つて其父は切腹家は退散、其名滿都に轟く俠客と天下無双の力士と師弟の契を結び、練磨の柔術よく弟士をして日の下開山横綱たらしめ、一夜の突り、助太刀の奮闘く、禪僧に心懸の工夫を練る、映は實に佳境に進む

三宅青軒君著

(寫眞版入)

口武士道 續士手の道哲

價廿五錢 郵稅四錢

不思議の再會に、夫婦の縁未だ消せず、宗家の安全を計つて幾度か死に臨み幾度か危に遇ひ、力士、俳客、忠僕、師弟の義侠よく、奸臣を滅して君家始めて安し而も戀無常會者常離、浮生の果敢なきを悟つて剃髮染衣、道傍の哲人となつて煩惱の遊子を戒む人同一代の轉變を描いて妙味津々、

廣津柳浪先生序
有本天浪 君著

寫眞版入

口家庭 女天一坊

價廿五錢 郵稅四錢

妖婦二人結托して暗愚なる華族の當主を惑亂し賢良なる夫人を令嬖は或は無限の怨を呑んで死し閻々の情に堪へずして踪跡を失す、義侠なる紳士夫婦は狂女を救ふて陰謀の顛末を暴露し、令嬖を保護して美顔終に全く妖婦忽ち却けられ家庭は圓滿、結婚の慶事に局を結ぶ人情の秘を聞き、社會の影を暴く、

鹿島櫻卷君著

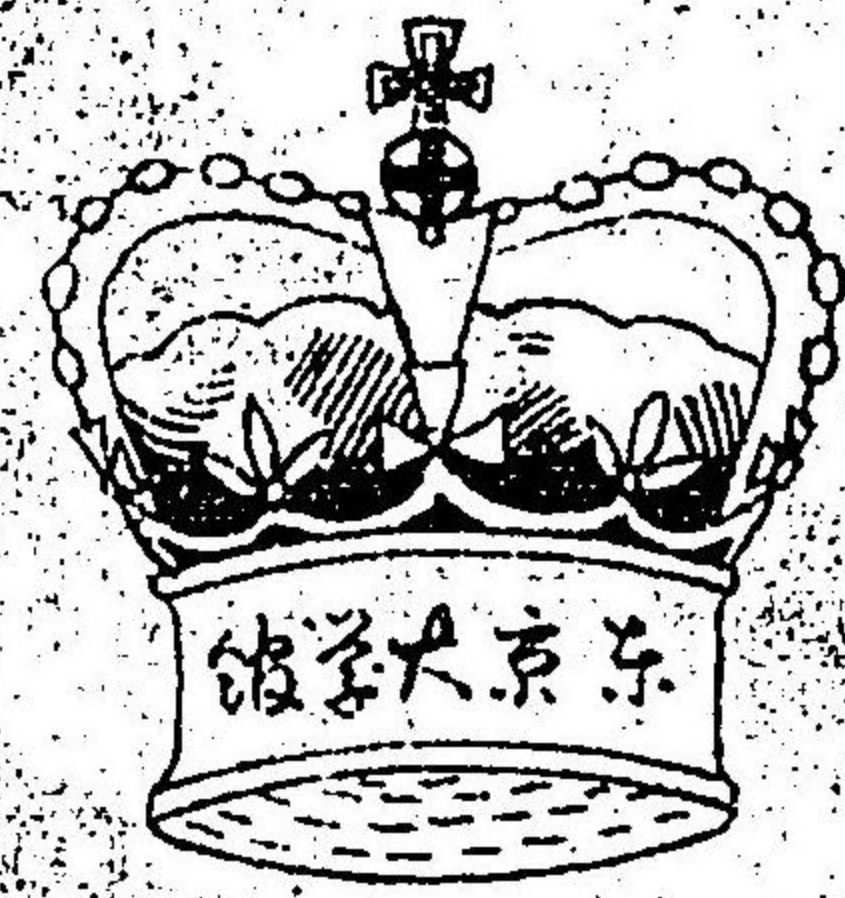
寫眞版入

口チハッ 探險 無底湖の秘密

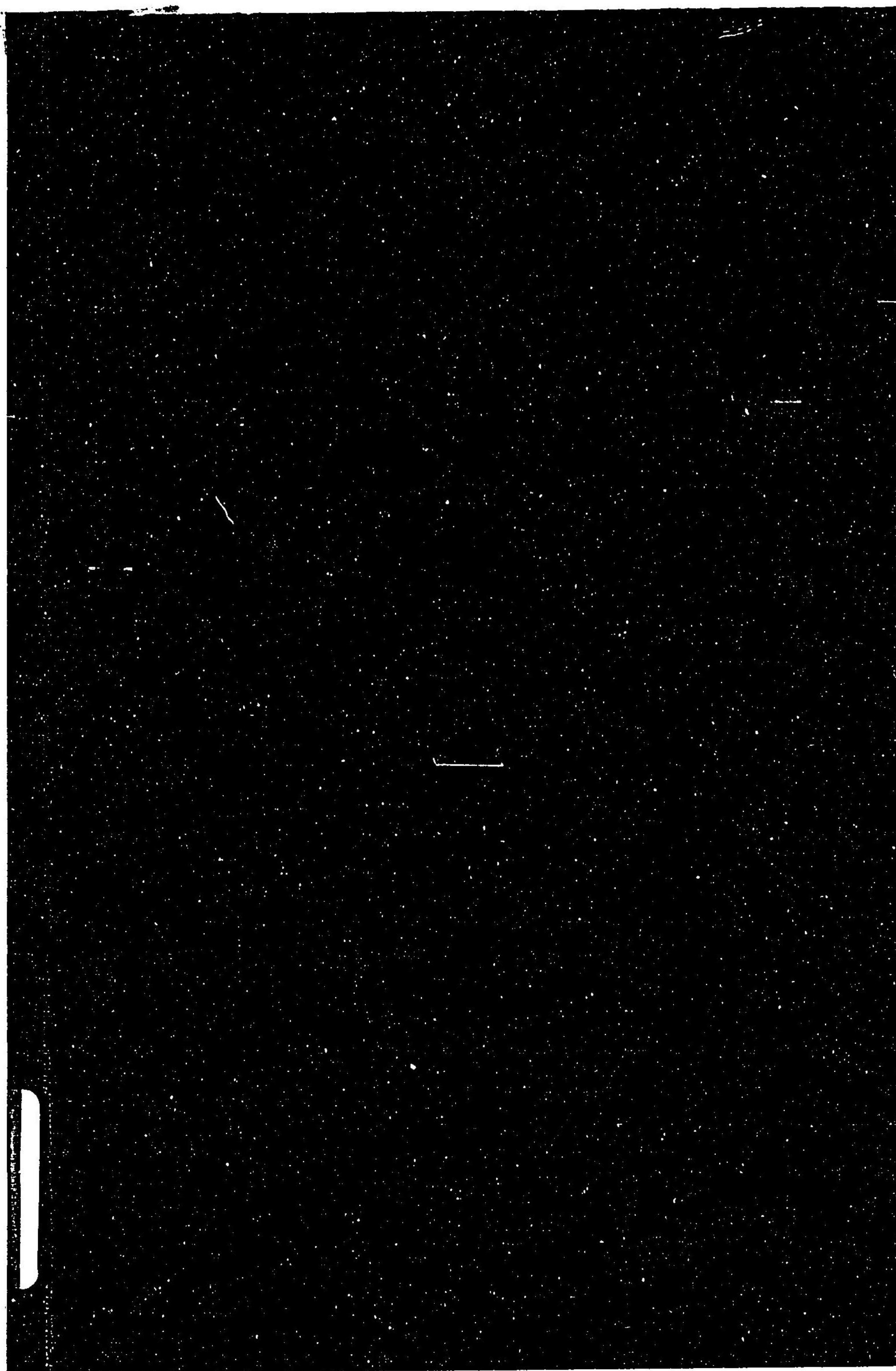
價廿五錢 郵稅四錢

「世界秘密國」に類はしたる冒險者の一人由佐武雄の實地見聞せる怪談珍話を述べたる事實にして、愈々出で愈々怪、西藏西北原の雪痕は如何、一の虚構なく一の誇語なし、極秘極怪の物語りはこれ!

工ノ94



北京大飯店



特22

601

洋行 世界滑稽旅行
奇談

国立国会図書館

091779-000-8

特22-601

世界滑稽旅行

五峰仙史/著

M39

DBO-0294



特22

601

洋行 世界滑稽旅行
奇談

国立国会図書館